

# 現代ラテンアメリカにおけるカトリシズムの諸相（1）

水戸博之

キーワード：アルゼンチン・イエズス会・解放の神学・カトリシズム・社会正義・第2  
ヴァティカン公会議・貧困・マイノリティ・ムヒカ神父・ラテンアメリカ

## 0.

本研究は、平成21年度に始まった科学研究費補助金基盤研究（B）「20世紀における多様なマイノリティ状況の解明と共生言説の検討（研究代表者・田所光男）」において、ラテンアメリカの宗教を担当する筆者の研究成果の一部である。<sup>1</sup>まず、本論において、何故ラテンアメリカにおいて多数派を占めるはずのカトリックをマイノリティとして対象とするのかについて、説明の必要があろう。また、この問いの枠組みの設定自体が、ラテンアメリカのカトリシズムおよびカトリック教会の内包する問題を端的に示している。<sup>2</sup>ここでのマイノリティの定義は、決して数量的な少数者または特別な集団という意味ではない。人口の上から言えば絶対的な多数者であり、むしろ「一般大衆」という表現が相応しい人々が対象である。では、如何なる意味におけるマイノリティであるのか。あえて簡潔に表現するならば、寡占状態にある富と権力から疎外され、時に搾取のみならず迫害の対象となる「貧しき人々」ということである。<sup>3</sup>

貧困と格差は、ラテンアメリカの多くの地域にとって、宿痾ともいべき社会問題である。近年、貧困に関しては、統計的にかなり改善の傾向が見られるものの、生活水準を向上させるはずの経済成長が格差をむしろ助長する結果を生んでいるなど、楽観できる状況ではない。本稿で中心となるアルゼンチンに関しては、全体的に生活水準が20世紀の前半以来すでに高かったこともあり、むしろ格差の解消がなかなか進まないようである。<sup>4</sup>

ラテンアメリカといっても地理的にも時代的にも広い領域である。本研究の時間的視野として、第2ヴァティカン公会議（1962-1965）が開催された1960年代から現代を対象とする。カトリック教会の歴史において、60年代は、この公会議を契機に、ラテンアメリカの教会全体が、存在感を示し独自性を発揮し始めた時代である。本研究の重要な視点の一つは、約半世紀経過した現在において、第2ヴァティカン公会議の理念が、どこまで現実のものになったかを考察することである。

具体的な地域として、まず、アルゼンチンの1960-70年代の状況から考察を始める。

この時期は、残念ながら南米のバリと呼ばれる首都ブエノスアイレスの華やかなイメージとは裏腹に、政治的・社会的不安定や混乱が続く。アルゼンチンに何らかの関心を持つ日本人にとって、困惑と言及に躊躇いを感じさせる時期でもある。特に1976年から1983年までの軍政期には、3万人を越えると言われる行方不明者を中心に犠牲者が生じ、軍事政権自体、1982年、英国とのマルビナス（フォークランド）紛争の敗北により崩壊する。様々な努力がなされたにもかかわらず、なぜかくも数多くの悲劇を回避できなかったかという思いは筆者だけであろうか。

他方、何故にあえてこの時期のアルゼンチンから考察を開始するのかと問われるならば、次のように答えることができるであろう。何よりも当時のアルゼンチンには、多くの問題を内包しながらも、カトリシズムの歴史のみならず様々な分野において、21世紀初頭の今日においても色褪せない先進性が見出されるからである。さらに、本題に関してつけ加えるならば、以下に言及するように、当時の関係者が高齢とはいえ現役であり、資料の保存状態もかなり良好だからである。世界的に1960年代の回顧や再評価の動きが見出されるが、ラテンアメリカ、特にアルゼンチンは特異な位置を占めると考えられる。

本稿では、次の3点についてとりあげる。

1. 思想史における位置。本題に入る前に、対象となる事柄が、20世紀におけるカトリシズムの中でいかなる位置を占めるかあらかじめ把握する必要があるだろう。
2. アルゼンチンにおける資料の現状。本稿執筆時点で直接、原資料に触れることは不可能ではあるものの、二次的ではあれ資料の入手はある程度可能な状況であることを示す。
3. 60年代70年代を代表する人物：カルロス・ムヒカ神父。様々な実践を行いつつも業半ばにして1974年暗殺される。当時の宗教者と社会・政治、キリスト教とマルクス主義の関係の一つの典型を示す。

## 1. 思想史における位置 —第2ヴァチカン公会議から解放の神学—

ここでは時代的な視野の設定が意図するところであるから、関連する主要な出来事と人物を編年的に列挙するにとどめる。

ヨハネ23世 (Johannes XXIII 在位1958-1963)、第2ヴァチカン公会議 (Concilium Vaticanum Secundum 1962-1965)、パウロ6世 (Paulus VI 在位1963-1978)、エルデル・カマラ (Hélder Câmara 大司教1964-1985)、イエズス会第28代総長ペドロ・アルベ (Pedro Arrupe, S.J. 1965-1983)、第2回ラテンアメリカ司教総会議 (II Conferencia

General del Episcopado Latinoamericano, Colombia, Medellín 1968)、グスタボ・グティエレス(Gustavo Gutiérrez Merino, 1928-)『解放の神学 Teología de la liberación Perspectivas』1972<sup>5</sup>、イエズス会第32回総会 (Congregación General 32, 1975)。

ラテンアメリカのカトリシズムは、以上の約20年の期間において、いかなる変化を遂げたであろうか。カトリック世界の中における存在感を、単に信徒数の規模の大きさという点のみならず、新たな使命とともに自覚したということである。<sup>6</sup> このことは、第2ヴァティカン公会議の後、1968年コロンビア・メデジンにおける第2回ラテンアメリカ司教総会議の文書で明確に示されることになる。すなわち、公会議の目指す近代化における「支配する教会」から「任える教会」への改革は、特にラテンアメリカでは、貧者の側に立つ教会であることを強く意識したものであった。残念なことに、「解放の神学」と総称される宗教と社会との新たな関係を模索する潮流は、しばしば実践の場で社会主義思想や階級闘争に近い様相を示したことから、80年代、ヨハネ・パウロ二世およびヴァティカンとの間で摩擦を生じ、特に中米においては多くの聖職者が政治的立場を理由に犠牲になった。<sup>7</sup> 21世紀の初頭にあり、30年以上前の文献を再読して筆者が今になって思うことは、「解放」と訳される liberación (スペイン語) / libertação (ポルトガル語) という語を、単に一つの語彙としてではなく、深化すべき思索あるいは思想として、もっと冷静にとらえることができなかつたかという反省である。<sup>8</sup>

## 2. アルゼンチンにおける資料の現状:コルドバ・カトリック大学 (Universidad Católica de Córdoba) 所蔵「メイセハイエル・コレクション-ムヒカ・アーカイブ Colección Meisegeier-Archivo Mugica」

本コレクションは、ムヒカ神父のかつての同志でもあったイエズス会士ホセ・マリア“ピチ”メイセハイエル神父 (José María “Pichi” Meisegeier S.J. “ピチ”は愛称) が、収集した資料から構成される。師は、永年 MSTM: Movimiento Sacerdotal del Tercer Mundo (第三世界の司祭運動) に携わるとともに、ブエノスアイレス Retiro, Villa 31 地区、さらに1974年凶弾に倒れたムヒカ神父の遺志を継ぎ、志をともしする司祭たちとの Villa Miseria 地区における活動を記録し、多くの困難のにもかかわらず、関連資料を含め丹念に収集し保管してきた。これらは現代ラテンアメリカにおけるカトリシズムの貴重な記録である。<sup>9</sup> 2007年末にメイセハイエル師が所属するイエズス会とコルドバ・カトリック大学が合意し、師の収集資料の管理を大学が行うことになった。2008年2月に、大学が資料の整理と公開のため、全資料の寄贈を受け、2008年10月15日、コレクション公開の記念式典をコルドバ・カトリック大学において、学長、メイセハイエル師、図書館長らにより開催した。現在、部分的とはいえ、かなりの量の資料が、図書館

におけるオリジナルの閲覧のみならず、ホームページを通じて入手可能になっている。今後、寄贈資料の整理と分析が進むにつれ、カルロス・ムヒカ神父関係の資料のみならず、1960年代の第2ヴァチカン公会議前後から1980年代半ばの民政移行期までのアルゼンチンのみならずラテンアメリカ近現代史の重要なアーカイブの一つになると考えられる。

所蔵資料は次の10分野である。<sup>10</sup>

- I. MSTM: Movimiento Sacerdotal del Tercer Mundo (第三世界のための司祭運動)
- II. Archivo Carlos Francisco Mugica (カルロス・フランシスコ・ムヒカ神父資料)
- III. Archivo Alberto Fernando Carbone (アルベルト・フェルナンド・カルボネ神父資料)
- IV. MOSALAT: Movimientos Sacerdotales Latinoamericanos (ラテンアメリカ司祭運動)
- V. ESPOVE: Equipo Sacerdotal Pastoral y Obrero en Villas de Emergencia (困窮地区司牧労働司祭班)
- VI. Acción católica rural, ligas, movimientos agrarios y posteriores (農村地域カトリック・アクション)
- VII. CEA: Comisión Episcopal del Aborigen y Equipo Nacional de Pastoral Aborigen (先住民に関する司教委員会と全国先住民司牧班)
- VIII. INDAL: Información Documental de América Latina (ラテンアメリカに関する文書資料)
- IX. COEPAL: Comisión Episcopal de Pastoral (司教委員会教書)
- X. Bibliografía selecta (文献目録)

次にII. のカルロス・フランシスコ・ムヒカ・アーカイブについて概要を示す。16項目に分類がなされている。CMはCarlos Mugicaの略。

CM1. PERSONAL (個人資料): 文書、所持品

CM2 y CM2bis, PERSONAL: Villa Devoto 地区セミナーのノート。予備教育、哲学、神学に関する資料。

CM3. TEOLOGÍA (神学): ムヒカの思想

CM4. CORRESPONDENCIA ENVIADA / RECIBIDA (発信・着信書簡): 社会福祉省時代を除く各時期

CM5. DOCENCIA (教授活動): サルバドル大学

CM6. EN RELACIÓN AL MSTM (「第三世界のための司牧活動」関係)

- CM7. EN RELACION A VILLAS. VILLA 31 (RETIRO) (困窮地区関係。レティロ・ビジャ31 地区)
- CM8. “JESÚS Y LA POLÍTICA EN SU ÉPOCA (「現代におけるイエスと政治」)” (1972年3月21日刊 LA OPINIÓN 誌特集版掲載論文の草稿と関係文書)。論文執筆の準備に関する資料、草稿、他からの提案、刊行後のコメント。アランブル (Aramburu) 枢機卿の宗規的警告 (BOLETÍN ECLESIAÍSTICO A. DE BS. AS. ブエノスアイレス大司教区定期報告書)
- CM9. POLÍTICA NACIONAL (国政)
- CM10. POLÍTICA LATINOAMERICANA (ラテンアメリカ政治)
- CM11. SU ACTUACIÓN DESDE EL MINISTERIO DE BIENESTAR SOCIAL (社会福祉省からの活動) 書簡、受理した要請文書
- CM12. FOTOGRAFÍAS VARIAS DE / EN RELACIÓN A CM (カルロス・ムヒカ関係の写真・映像資料) ビデオ (リストのみ)、CD 付写真 (現像 Pablo Zubizarreta による)、Luis Liberti 作成視聴覚資料 (1984年5月)。1993年11月 H. De Linden 制作ビデオ “Zu Ostern gibt es keine Wunder” スペイン語版。
- CM13. TEMAS VARIOS (その他) 新聞切り抜き、ムヒカ関係書籍、パンフレット、文書、ムヒカに関するコメントの録音等。
- CM14. ARCHIVO DE PRENSA I (新聞メディア資料 I) 暗殺 (1974年5月11日) に関する一般のニュースと直後の反応に関する切り抜き。追悼記事。一周忌関連記事 (1974年5月11日)。諜報機関および Triple A<sup>11</sup> の反ムヒカ資料。
- CM15. ARCHIVO DE PRENSA II (新聞メディア資料 II) 暗殺後および没後 10 周年までの切り抜き。
- CM16. ARCHIVO DE PRENSA III (新聞メディア資料 III) 没後 10 年から現在までの、切り抜き、集会、記念式典、ポスター等の資料。

コルドバ・カトリック大学図書館は、コレクションの整備を 4 段階に計画している。

第 1 段階：資料の発見と収集。

第 2 段階：資料の分類およびカタログ化。

第 3 段階：コレクション目録のウェブ掲載。

第 4 段階 (最終段階)：資料のデジタル化。

現在構築中のアーカイブであるため、内容の詳細を知ることが未だできないが、10 分野のタイトルを見て、明確に看取できることは、ラテンアメリカの独自性を主張するとともに、先述の第 2 ヴァティカン公会議とイエズス会第 28 代総長ペドロ・アルベの指導の

もと開催された第32回総会(1975)の理念をこのコレクションが表していることである。注目すべき点を指摘すると、例えば、ムヒカ神父がメンバーでもあったI.MSTM(第三世界のための司祭運動)は、アルゼンチン社会における活動である。El Tercer Mundo<sup>12</sup>という言葉は、「第三世界」という訳語の適否とともに、やはり説明が必要であろう。一般に考えられているような「先進諸国」に対する「発展途上諸国」といった意味に限られるものではない。また、当時1960年代後半から70年代前半は、様々な混乱にもかかわらず、アルゼンチンを第三世界であると考えするには、内外ともに少なからぬ抵抗が存在したはずである。

カール・ラーナー(Kahl Rahner)やヴァルベルト・ビュールマン(Walbert Bühlmann)ら神学者によれば、第2ヴァティカン公会議は、カトリック教会の脱ヨーロッパ化とともにカトリック本来意味での「普遍性」を志向する契機となったといわれる。それは、かつて初期の教会がヘブライの伝統から離れギリシア世界へと展開していった事跡に対比される。第一の教会がオリエント起源であり、第二の教会がラテン西欧起源であるとすれば、第三の教会は「南」あるいは「第三世界」から生まれた教会の集合体である。<sup>13</sup> 聖職者がグループ名に、社会全体から見れば一部途上国の状況下にある困窮者を対象とした活動であったにしても、あえてTercer Mundoという語句を使用したことは、やはりこのグループの特質として認識すべきことであろう。また、現時点では概要を見るのみであるが、MSTM資料の学術的価値を示すものとして、収集資料が、支持者のみならず反対派のビラやパンフレットなどもからも構成されていることである。<sup>14</sup> さらに、VI. 農村における活動、VII. 先住民への対応を専門に行う司教会議と司祭グループ、といった領域を個別に設けていることも、多数を占める都市部市民のみならず社会の様々な集団に対する使命感を示すものと言えよう。

### 3. 60年代70年代を代表する人物：カルロス・ムヒカ神父

本章においては、当時のアルゼンチンにおけるカトリックシズムを代表する人物の一人としてカルロス・ムヒカ神父(Carlos Mugica Echagüe<sup>15</sup>, 1930-1974)の生涯と思想について予備的な考察を行う。ムヒカ神父は上述のように「メイセハイエル・コレクション」の主要分野を構成する。

ムヒカ神父については、生前出演したテレビ番組の録画を始め論文、活動の記録等、かなりの情報量がインターネット上の複数のホームページでも入手できるにもかかわらず、日本においては、例えば、2009年4月に完結した『新カトリック大事典』(研究社)に項目・記述ともに見出されないなど、あまり知られていないようである。<sup>16</sup>

2点のみであるが、筆者が直接確認した日本語の文献あるいは記述には次のものがあ

る。近年のものでは、ホルヘ・アンソレーナ (Jorge Anzorena S.J.) 『世界の貧困問題と居住運動』(明石書店) 2007年、p.91: 上述のメイセハイエル神父 (本文ではピッチ神父) が創設者の一人である NGO “SEDECA (Secretariado de Enlace de Comunidades Autogestionarias: 自立コミュニティ・ネットワーク事務局) の紹介の中で、組織は、暗殺されたムヒカ神父の活動を継承発展させたものという記述がある。また、80年代に刊行された文献に、マルティン・ランゲ; ラインホルト・イブラッカー編『ラテンアメリカの民衆と解放の神学—迫害と殉教の中の希望の証人たち—』(明石書店) 1985年 (原著: Martin Lange, Reinhold Iblacker, S.J., “Christenverfolgung in Südamerika; Zeugen der Hoffnung”, Freiburg, 1980), p.114-p.116: IVスラムという地獄「カルロス・ムヒカ神父」の項目がある。2ページ半程度の短い記述であるが、当時の大司教との摩擦やペロン主義の立場であったこと、神父の名前が、彼の活動を継承する司祭全体への通称になっているなど、注意を引く内容である。<sup>17</sup>

神父についての情報が日本に伝わりにくい一因として、彼の業績自体が、没後35年後の今日にあっても、上記のように、アルゼンチン本国およびカトリック教会において、未だ一定の評価を確立するに難しい点があるということが考えられる。<sup>18</sup> いずれにしても、ラテンアメリカのカトリックに関する日本語文献は、近年刊行点数は増加しつつあるとはいえ、未だ対象領域の広さに対し情報の絶対量が十分であるとは言えない。ラテンアメリカが21世紀のカトリック教会にとって一層重要な位置を占めるであろうことは、多くの司祭も認めていることである。ラテンアメリカにおけるカトリシズムの動向は、その地域のみならず、世界全体への影響も決して小さなものではないことから、慎重に情報の収集と分析を継続しなければならないであろう。

### 3. 1 カルロス・ムヒカ神父小伝

現時点で入手できる資料の媒体に限られ、さらに、様々な評価が見られるものの、経歴についてはかなり詳細なデータがあることから、ムヒカ神父の業績と時代的背景を理解するために、生涯の中で本稿に特に関連すると思われる事柄を略述してみる。<sup>19</sup>

カルロス・フランシスコ・セルヒオ・ムヒカ・エチャグエ (Carlos Francisco Sergio Mugica Echagüe) は、1930年10月7日ブエノスアイレスで生まれる。父アドルフォ・ムヒカ (Adolfo Mugica) は保守党の創設者であり、1938年から42年まで国会議員を務め、後、1961年アルトゥロ・フロンディシ (Arturo Frondizi) 政権の外相を歴任した。母、カルメン・エチャグエ (Carmen Echagüe) は、ブエノスアイレスの裕福な地主の娘であった。本人も認めるように、青年期までは貧困とは全く無縁の階層の出身である。7人兄弟の3番目であったが、兄弟の中で、唯一人、初等・中等教育をカトリック系の学

校で学ばなかった。中等教育の終わるところから勉学に頭角を現し、El Colegio Nacional de Buenos Aires を優秀な成績で卒業する。1949年、ブエノスアイレス大学に入学し法学を学び、そこで、チェ・ゲバラ（Che Guevara）の兄弟ロベルト（Roberto）と知り合う。1950年、聖年（el Año Santo）にちなみ、数名の司祭と友人とヨーロッパへ旅行し、そこで、神学校に入る考えを固め、1952年3月21歳で神学生となる。

1954年末、ドイツ系修道会経営の学校<sup>20</sup>からの要請で、サンタ・ロサ・デ・リマ（Santa Rosa de Lima）小教区において主任司祭であったイリアルテ（Iriarte）と司牧活動を開始したことが、その後の人生を決定づけた。当時、すでに教会とペロン政権との関係は、政権の独裁的手法と労働政策の社会主義的傾向をめぐりかなり緊張が高まっていた。<sup>21</sup> 決定的であったのは、政権側が12月に離婚法の制定を行ったことに対し、翌1955年6月ピオ12世の破門宣告で対抗したことである。これが引き金となり、9月に軍がクーデターを起こし政権は崩壊し、ペロンはパラグアイに逃れ、その後スペインへ亡命する。当初、政権崩壊に歓喜したムヒカであったが、貧困地区で、チョーク書きのスローガン「ペロンなくして祖国も神もない。カラス（神父）どもを倒せ」を見て、考えを改める。<sup>22</sup>

1959年12月司祭叙階。当時レコンキスタ（Reconquista）の司教となっていたイリアルテに同伴しチャコ（Chaco）州に赴き、現地の貧困状態に衝撃を受ける。ブエノスアイレス帰還後、1960年から1963年まで、アントニオ・カッジアノ（Antonio Caggiano）枢機卿に使え、同時に、エリート層の集まる教区の代理司祭とブエノスアイレス大生を主体とするカトリック・アクション青年部（la Juventud de Acción Católica）顧問に任ぜられる。1965年10月、哲文学部で開催された「カトリック者とマルキスト間の対話 *Diálogo entre católicos y marxistas*」に参加し、保守的な高位聖職者に深い懸念を抱かせる。もうひとつ重要な契機は、レティロ（Retiro）地区の困窮地域の主任司祭就任の依頼を受けたことである。またこの時期に、サルバドル大学などで神学の講義を行い、ラジオ番組の説教を依頼される。イエズス会の運営するサルバドル大学において、メイセ・ヘイエル神父らイエズス会士と交流し教授活動と同時に第三世界におけるキリスト教に関する思索を深めたと思われる。イリア（Illía, Arturo Umberto 1963-66）政権に対する批判は、富裕層の信徒間に、政治に関与しすぎるという批判を生み、結局、他教区の代理司祭となる。

学生たちにとって、ムヒカ神父は非常に魅力的な人物であった。<sup>23</sup> 学生との交流の場で、後のペロン派武装組織「モントネーロス Montoneros」の創設者たちと知り合う。1966年、サンタフェ（Santa Fe）州農村地区の司牧活動に参加し、飢餓と貧困にあえぐ農民たちの言葉を深く心に刻む。後にビデラ軍事政権（Videla, Jorge Rafael 1976-81）の経済相に就任する農業法の教授と激しい議論を行う。



講演において、ペロニズムへの支持を鮮明にし、かつチェ・ゲバラ、毛沢東、カミロ・トレス<sup>24</sup>を引用。アランブル大司教との衝突が一層頻繁となり、困窮地区との接触の契機となったドイツ系修道会のシスターらとの摩擦も激しくなる。

1967年、アベジャネーダ (Avellaneda) 教区ポDESTA (Podestá) 司教の代理として、ボリビアヘチェ・ゲバラの遺体の返還要求と逮捕拘束中のELN (Ejército de Liberación Nacional 国民解放戦線) 兵士の状況を確認するため赴く。同年11月から1968年10月までパリで神学を学び、「5月革命 Mayo francés」を直接目撃する。また、父の職務の関係から、スペインへ行きペロンを訪問する。また、極秘裏にプラハ経由でキューバへ渡航し10日滞在。パリで、MSTM (第三世界のための司祭運動) の設立を書簡で知り、加盟する。

アルゼンチン帰国後、司牧方針の相違から礼拝堂付司祭職の交代などがあったが、レティオ地区のビジャ (Villa) に小聖堂が開設され、担当することになる。また、兄弟の経済的援助で多目的ホールが建設され、小聖堂“Cristo obrero”とともに、司牧活動の拠点となる。一方、サルバドル大学神学部をはじめ経済、法学、政治学の各学部での教授活動に復帰するほか、他の区の活動依頼も引き受ける。

MSTM への参加が、大司教区の全聖職者に対して政治的問題への公的な関与を禁じようとするアランブル大司教補佐との対立をさらに先鋭化する。さまざまな反発が起きたものの、首都のMSTMは、この命に服する。メディアへ出ることがより頻繁になり、広く一般に知られるようになる。また、困窮地域へマスコミの取材も訪れるようになる。

1969年5月にコルドバ大学の学生運動から始まったコルドバ暴動 (Cordobazo) が国内諸都市に広がり、さらに都市ゲリラ組織の活動が活発となる。1970年5月、アランブル元大統領が誘拐暗殺される。暗殺事件共謀の嫌疑を受けたアルベルト・カルボーネ神父の弁護にあたる。アランブル大司教は、ムヒカ神父に laicización<sup>25</sup> を提案するが断固として拒絶する。亡くなるまで聖職に留まる決意は揺るがなかった。

その後間もなく、治安機関との衝突で死亡したモンテネーロスのメンバーでもあった友人の葬儀を、かつてエバ・ペロンの聴罪司祭でもあったエルナン・ベニテス (Hernán Benítez) 神父らとともに行う。その際の説教が、不正確な形で新聞に掲載された結果、逮捕一週間の拘留処分を受け、さらに30日間の職務停止を大司教から命じられる。

ムヒカは、ビジャ住民への活動に一層専念し、メディアへの登場を控えるようになる。1972年11月、ペロンがアルゼンチンへ18年ぶりに帰国する際、ベルナツサ (Vernazza) 神父とともに迎える。この行動が大司教との亀裂をさらに深める。一方、12月には、帰国して間もないペロンがビジャを訪れる。1973年議会選挙の際、FREJULI (el Frente Justicialista de Liberación ペロニスタ党) 候補の打診を受けるが断る。

ペロン政権成立後、社会福祉省顧問に就任するが、まもなく、官庁と住民の間に意思の疎通がないことを理由に辞任し、これがペロニスタ右派との不和の原因になったとされる。また、左派のモンテネーロスとの関係も、犠牲者への追悼ミサにおける発言等を通じ、疎遠なものになっていき、左右両派から脅威にさらされるようになる。また同1973年に、ムヒカ神父の著作として“Peronismo y Cristianismo (ペロン主義とキリスト教)”が刊行されるが、記事を無秩序に編集したものであり、神父自身出版には関係なしと主張していた。

1974年、“Misa para el Tercer Mundo (第三世界へのミサ)”の歌詞を執筆し、作曲 Roberto Lar、演奏 Grupo Vocal Argentino により RCA から、レコードを作成するが政府の妨害で中止となる。<sup>26</sup>

1974年5月11日土曜日午後8時15分、サン・フランシスコ・ソラノ教会でミサを終え、教会そばに駐車してあった車に乗りしようとしたところ銃撃され、病院に搬送されるが午後9時に死亡。<sup>27</sup> 事件後、左右両派とも関与を否定したが、極右テロ組織 Triple A : Alianza Anticomunista Argentina (アルゼンチン反共連盟)の犯行と考えられている。

棺は、現在、レティロ・ビジャ31のクリスト・オブレロ聖堂に安置されている。

---

<sup>1</sup> 科学研究費補助金基盤研究 (B) (一般) (H21~H24) 課題番号: 21320069 「20世紀における多様なマイノリティ状況の解明と共生言説の検討 (研究代表者・田所光男)」。

<sup>2</sup> カトリシズムにおけるマイノリティの概念については、2009年6月にスペイン出身とアルゼンチン出身のイエズス会士を個別に訪問し、問題の設定と研究の妥当性についてそれぞれ約2時間にわたり意見交換を行った。

なお、筆者の宗教的立場について明らかにしておくべきであろう。筆者は、カトリック信徒でもいわゆるクリスチャンでもない。初詣に行き、仏式の葬儀に参列する日本人の大多数を占めるであろう「神道・仏教徒」である。筆者が多少なりとも本研究のテーマに論及する資格があるとすれば、かつての恩師と同僚がイエズス会士であったことである。

<sup>3</sup> 第2ヴァチカン公会議 (1962-1965) において、「貧しい人々、虐げられた人々の連帯。教会は、権力者の側にくみせず、『小さい人々』の代弁者となる。」ことが明確に示された。『新カトリック大辞典』研究社、2009: 「ヴァチカン公会議、第2」の項: I, p.579r。また象徴的な事例として、13世紀にアッシジの聖フランシスコが創立した一般に「フランシスコ会」と呼ばれる清貧を重要な理念とする修道会が、「小さき兄弟会」Ordo Fratrum Minorum (OFM) という名称であることから、カトリック教会におけるマイノリティが数量的な少数者を必ずしも意味しないということが理解できよう。

<sup>4</sup> 『図説ラテンアメリカ経済』日本評論社、2009、p.62-p.70: 「第7章 貧困と格差」(執筆・浜口伸明)。図7-1 (p.63) で貧困比率の1990年から2006年への変化を見ると、アルゼンチンに関しては、わずかに改善が見られるものの20%前後のままである。他方、ブラジルが40%台から30%未満に、

チリがやはり約40%から10%台半ばまで改善している。

<sup>5</sup> 日本語訳：関望・山田経三訳『解放の神学』岩波書店1985(2000)。

<sup>6</sup> 第二ヴァチカン公会議は、教会の近代化とされるが、公会議自体においてラテンアメリカの存在感は薄く「沈黙の教会」と呼ばれた。参照、乗浩子『宗教と政治変動—ラテンアメリカのカトリック教会を中心に』有信堂1998、p.107-p.109; p.121。

<sup>7</sup> 参照、乗、前掲書、特にp.164-p.187：6章・革命と反革命—ニカラグア革命をめぐる。

<sup>8</sup> ムヒカ神父自身、著作の中で、*liberación* という語をよく用いている。

<sup>9</sup> メイセヘイエール師については、同イエズス会のホルヘ・エドゥアルド・アンソレーナ師 (Jorge Eduardo Anzorena S.J.) からのご教示である。両師ともムヒカ神父と同世代である。関係者の多くが70歳代後半以上であることから、次世代による証言の記録や資料の保存と管理が望まれる。

<sup>10</sup> 組織名の訳はIを除き筆者の試訳。整備中のコレクションのため、分野の名称のみからは内容を正確に判断できない。

<sup>11</sup> *Alianza Anticomunista Argentina* (アルゼンチン反共連盟):AAA 通称 *la Triple A*。組織名の訳は、乗、前掲書、p.25による。

<sup>12</sup> 活動家「第三世界派 *los terceristas*」と呼ぶ。参照、乗、前掲書、p.126。

<sup>13</sup> Clodovis M. Boff, OSM, “A Originalidade Histórica de Medellín” 1968年コロンビアのメデジンで開催された第2回ラテンアメリカ司教会議 (CELAM) の歴史的意義について、クロドヴィス・ボフ (レオナルド・ボフの弟) が記した論文において言及された、Karl Rahner (1904-1984) とカプチン・フランシスコ修道会士 Walbert Bühlmann (1916-2007) らの見解。 <http://www.sedos.org/spanish/boff.html>

<sup>14</sup> 例えばビラ、ポスター、パンフレット資料の “en contra” である。15. VOLANTES, AFICHES, CARTELES, PANFLETOS MSTM Y AFINES. ORIGINALES, A FAVOR Y EN CONTRA。 [http://www.ucc.edu.ar/biblioteca/biblioteca\\_seccion.php?sec=40&pag=645](http://www.ucc.edu.ar/biblioteca/biblioteca_seccion.php?sec=40&pag=645)

<sup>15</sup> HPの多くは Mugica の綴りを使用しているが、Mujica が本来の綴りのようである。Cf. “Discurso Del padre Rafael Velasco sj (コルドバ・カトリック大学学長ラファエル・ベラスコ神父の Colección Meisegeier への謝辞) [http://www.ucc.edu.ar/biblioteca/biblioteca\\_seccion.php?sec=40&pag=744](http://www.ucc.edu.ar/biblioteca/biblioteca_seccion.php?sec=40&pag=744)”

<sup>16</sup> カトリック・コルドバ大学所蔵メイセヘイエール・コレクション・ムヒカ・アーカイブ (Colección Meisegeier, Archivo Mugica) 以外に、2009年10月31日時点でウィキペディア・スペイン語版をはじめ、次のHPが容易にアクセスできる。

<http://www.elortiba.org/memoria.html> “Carlos Mugica” アイコンにカルロス・ガルデルの肖像。

<http://carlosmugica.com.ar/> “MÁRTIR DE LOS POBRES CARLOS MUGICA SACERDOTE HOMENAJE A LOS 35 AÑOS DE SU MARTIRIO”

<http://atrapadosenradio.blogspot.com/2008/03/padre-mugica.html> “Atrapados en Libertad: Padre Mugica”

<sup>17</sup> 項の冒頭の暗殺の時点に関する記述は、「ちょうどミサを捧げているとき」とされているが、一般には、ミサを終えて、帰路、車に乗車しようとしたところを銃撃されたと伝えられている。Cf. <http://carlosmugica.com.ar/textos/historia.htm>

他にムヒカ神父についての日本語の情報として、次の記載が見出される。鈴木頌 (しょう) 氏作成サイト『ラテンアメリカの政治』「ラテンアメリカ各国年表」「アルゼンチン年表その1：1974年ペロンの死」「5月 聖職者カルロス・ムヒカが暗殺される。」 <http://www10.plala.or.jp/shosuzuki/>

[chronology/laplata/argent1.htm](http://chronology/laplata/argent1.htm)

<sup>18</sup> 筆者が今までに見出した教会関係者からの文書は、没後25周年にあたる1999年、キルメス (Quilmes) 司教区ホルヘ・ノバク (Jorge Novak) 司教が教会関係者に発したムヒカ神父を福者に列する手続きを促す文書のみである。<http://carlosmugica.com.ar/textos/novak.htm>

<sup>19</sup> 資料は、上記 <http://carlosmugica.com.ar/textos/historia.htm> およびウィキペディア・スペイン語版 [http://es.wikipedia.org/wiki/Carlos\\_Mugica](http://es.wikipedia.org/wiki/Carlos_Mugica)、編年対応する増田義郎編『世界各国史26 ラテン・アメリカ史II南アメリカ』山川出版社2000年；乗、前掲書による。なお、2009年に Editora Patria Grande 社(ブエノスアイレス)から Martín De Biase 著“Entre dos fuegos Vida y asesinato del padre Mugica (ムヒカ神父の生涯と死)”の新版が出版されたが本稿執筆には活用できなかった。またこれ以前に1998年と2002年にも同書は出版されているが、いずれも絶版であり入手できなかった。Entre dos fuegos は辞書では「進退窮まって」「板ばさみ」などと訳語がでていますが、文字通り二つの火の軋轢の中にあった生涯といえる。没後35周年を記念する伝記であり、講演会等も行われた。<http://www.editorapatriagrande.com/ferias.html> (最終アクセス2010-01-07)

<sup>20</sup> La escuela Paulina de Mallinkrodt. 現在も続く名門校である。なお、創立者 Paulina von Mallinkrodt (1817-1881) は、1985年、ヨハネ・パウロ二世により福者 (beata) に列せられた。[http://www.mallinkrodtcolegio.com/colegio/paulina\\_m.htm](http://www.mallinkrodtcolegio.com/colegio/paulina_m.htm)

<sup>21</sup> ペロンと教会との関係が、エバ・ペロン存命時 (María Eva Duarte de Perón 1919-1952) の良好なものから、教会に対する武力行使にまで悪化したのか、一般にこのような説明がなされている。しかしながら、後のムヒカ神父の親ペロンの活動を考えると、やはり不明な点がある。その他、筆者の複数の伝聞では、スペイン内乱を逃れてきたアナルコ・サンディカリストの左派が特に政権末期に過激な行動をとり関係を決定的に破綻させたという。文献として次のものがあるが、本稿では十分に参照できなかった。今後の課題としたい。松下洋『ペロニズム・権威主義と従属』有信堂、1987；Lila M. Caimari, “Perón y la Iglesia Católica –Religión, Estado y sociedad en la Argentina (1943-1955), Buenos Aires, 1995.

<sup>22</sup> “Sin Perón no hay Patria ni Dios. Abajo los cuervos (=curas)”. ペロン派から見た伝記であることは留意しなければならないだろう。

<sup>23</sup> 残されたインタビュー番組の映像。例えば Universidad Nacional de Lomas de Zamora, Roberto Di Chiara 制作ドキュメンタリー冒頭部分：<http://www.youtube.com/watch?v=OG1h0E9VJ8I> (最終アクセス2009-12-15)

<sup>24</sup> Camilo Torres (1929-1966)。コロンビアの聖職者。1964年司祭から反政府闘争のゲリラ組織に加わり銃撃戦で死亡。しばしば解放の神学の実践者または武力闘争の先駆者の例としてあげられる。参照：G. アンドラーデ・中牧弘允『ラテンアメリカ宗教と社会』新評論1994年、p.119；6章ラテンアメリカにおけるカトリック教会と国家 (G. アンドラーデ)；『世界各国史26 ラテン・アメリカ史II南アメリカ』、p.394-p.395。

<sup>25</sup> この段階での laicización が、政教分離という意味での政治に関与するなという原則論であったのか、さらに進んで、政治に関与し続けるのであれば、聖職を離脱し俗人 (laico) になれという意味であったのか。

<sup>26</sup> <http://www.elortiba.org/memoria.html> 等で歌詞、演奏にアクセス可。

<sup>27</sup> 最後の言葉は、看護師に発した「今こそ、これまで以上に我々は民衆の立場に立たなければならない！ ¡Ahora más que nunca tenemos que estar junto al pueblo!」と伝えられる。